

# 批判的社会理論における「正当化」と理論実践

——フレイザー＝ホネット論争再考——

東京大学 出口剛司

## 1 目的

本報告の課題は、それぞれ批判的社会理論の発展的継承をめざすナンシー・フレイザーとアクセル・ホネットの間で展開された承認論争の再検討作業を通して、社会学にとって理論研究のもつ意義を明らかにすることにある。フランクフルト学派の批判理論を継承する批判的社会理論には、ヘーゲル左派の遺産として受け継いだ社会批判の「審級 (Instanz)」に関する独自の見解が存在する。本報告ではこうした批判の審級の「正当化 (Rechtfertigung)」という理論実践の位相を解明することによって、社会学における理論の自己理解を拡大、発展させることをめざす。

## 2 要旨

社会理論の文化論的展開を経て、批判的社会理論の中核概念が財の「再配分」から文化の「承認」へと移行しつつあるという時代背景の下で、ナンシー・フレイザーとアクセル・ホネットの間で再配分＝承認をめぐる論争が繰り広げられた。しかしながら、承認概念の多層性を根拠に「承認一元論」を展開するホネットと、存在論的判断を回避して再配分＝承認の「パースペクティブ二元論」を提唱するフレイザーの立場は、その表題に反映されているような「再配分か、承認か」という二項対立図式の上では展開せず、「承認≡再配分」対「承認＝再配分」という 1.5 項対立とでも表現すべき曖昧な構図の中で進展し、論争それ自体も論理展開の面で明確な争点を終始形成することなく収束した感がある。

それに対して本報告では、両者の主張の違いを「命題の『正当化』を行う『審級』の位相の差異」として再構成する。結論を先取りすれば、ホネットの承認論が異議申し立て (承認をめぐる闘争) それ自体の「言説化＝正当化」を志向するのに対して (ヘーゲル左派的内在主義)、フレイザーの承認論は多元的な主張間の「裁定＝正当化」をめざすもの (カント的基礎づけ主義) と理解することができる。さらに本報告では、こうした論争の再構成作業を通して、論争それ自体の論点整理を行うと同時に、社会学における理論実践の意義について新たな提案を行う。本論争が提起するように、価値多元的社会では理論に対して社会構造及び変動の普遍的・抽象的記述、具体的な分析枠組みの提示という伝統的役割に加え、命題に対する「正当性」付与という役割が期待されることになる。本論争には「承認か、再配分か？」という問いの背後に、いわゆる超越的な基礎づけが不能となった時代に「いかにして『正当化』が可能か？」という価値自由と客観性をめぐる古くて新しい問題が横たわっているのである。

## 文献

Fraser, N. & Honneth, A., 2003, *Umverteilung oder Anerkennung*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. =2013 加藤泰史監訳『再配分か承認か：政治・哲学論争』法政大学出版局